

若田坂上遺跡 2

—市道C-1001号線歩道橋整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2018

高崎市教育委員会

序

高崎市は、古来より関東と信越をつなぐ交通の要衝に位置する人口約37万5千人の中核市です。

平成29年10月には、本市に所在する特別史跡である山上碑、多胡碑、金井沢碑の上野三碑が、ユネスコ「世界の記憶」に登録されました。碑文の内容から読み解ける古代の様相や文字文化の普遍的価値が認められたことは大変喜ばしいことです。この登録を契機に、本市の持つ文化財の価値が日本全国に留まらず世界に広く知られることを期待します。

本書は、若田町および八幡町における歩道橋整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。本遺跡周辺では各時代の集落や墓域が濃密に分布しております。このたびの調査では、近世以降とみられる石積遺構を検出し、この地において人々が継続して生活していたことを示す成果をあげました。本書は、これらの成果を文化財調査報告書第404集としてまとめたものです。

結びに、本遺跡の発掘調査および報告書刊行にあたりご協力をいただきました関係機関ならびに関係者の皆様に心から感謝申し上げ、序といたします。

平成30年3月

高崎市教育委員会
教育長 飯野眞幸

例　　言

1. 本書は、市道C-1001号線歩道橋整備事業に伴い実施した「若田坂上遺跡2」の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、高崎市若田町328-1番地に所在する。
3. 本遺跡には、高崎市遺跡番号660を付した。
4. 本遺跡の発掘調査および整理作業は、高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課埋蔵文化財担当が行った。調査組織は以下のとおりである。

職名／年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
教育長	飯野 真幸	飯野 真幸	飯野 真幸
教育部長	上原 正男	上原 正男	小見 幸雄
文化財保護課長	若狭 徹	若狭 徹	角田 真也
埋蔵文化財担当係長	角田 真也	角田 真也・矢島 浩	神澤 久幸・矢島 浩
庶務担当	加藤 志津代・針井 修	加藤 志津代・針井 修	岡田 清香・加藤 志津代 金井 英一・金山 悟
調査・整理担当	山本 ジェームズ 南雲 博文	山本 ジェームズ	山本 ジェームズ

5. 発掘調査期間は、平成27年12月21日～平成28年3月30日である。
6. 本書の執筆は山本が行った。
7. 発掘調査中の遺構の写真撮影は調査担当者が行った。
8. 図版等の作成は担当者および担当者の指示の下、補助員が実施した。
9. 発掘調査において、表土掘削および埋め戻し作業は(株)井ノ上が実施した。
10. 遺構平面測量図および石積遺構立面図の作成、ならびに遺跡の空中写真撮影は㈱測研に委託した。
11. 各調査の出土遺物や記録図面、写真類は高崎市教育委員会文化財保護課で保管している。
12. 発掘調査にあたり、地元関係者および関係機関、所管部署にご協力をいただいた。
13. 発掘調査および整理作業には多くの補助員にご尽力いただいた。記して感謝する。

凡　　例

1. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図（下室田）および1/10,000高崎市都市計画図を元に作成した。
2. 本書中の座標値は平面直角座標第IX系国家座標（世界測地系）を原則としており、方位は同座標北（G.N.）である。
3. 本書中の図版縮尺は、各図に表示している。
4. 断面図に付した標高はT.P.を基準とした。
5. 土層・遺物の色調および土壤の注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所監修1967『新版標準土色帖』（1998年版）を使用した。
6. テフラ等火山噴出物には次の略号を使用した。
 - ・浅間A軽石：As-A 1783（天明3）年
 - ・浅間B軽石：As-B 1108（嘉承3・天仁元）年
 - ・浅間C軽石：As-C 3世紀末～4世紀初頭
7. 遺構名称および遺構番号は、原則として調査時に付したものを使用した。

目 次

序

例言・凡例

目次・図版目次・写真図版目次

第1章 調査に至る経緯		第3章 検出した遺構	
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 調査の概要	5
第2節 調査の方法	1	第2節 基本土層	5
第3節 日誌抄	1	第3節 検出した遺構	8
		(1) 石積遺構	
第2章 地理的・歴史的環境		第4節 まとめ	8
第1節 地理的環境	2		
第2節 歴史的環境	2		
		写真図版	
		報告書抄録	

図 版 目 次

第1図 若田坂上遺跡2 周辺遺跡位置図	3	第4図 石積遺構平面図	6
第2図 若田坂上遺跡2 遺構全体図	4	第5図 石積遺構立面図・断面図	7
第3図 若田坂上遺跡2 基本土層柱状図	5		

写 真 図 版 目 次

遺構写真	PL. 1 ~ 5
------	-----------

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

平成26年4月に高崎市建設部土木課（以下、「土木課」）より高崎市教育委員会文化財保護課（以下、「文化財保護課」）に、市道C-1001号線歩道橋整備事業に係る埋蔵文化財の扱いについて協議依頼があった。協議の結果、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、土木課より文化財保護課に確認調査の依頼があった。また、同年5月29日に文化財保護法第94条に基づく通知が土木課より文化財保護課に提出された。

本事業地の周辺では、東隣接地に市指定史跡・劍崎長瀧西古墳や金製垂飾付耳飾や韓式系土器などの渡来系遺物を出土する遺跡として名高い劍崎長瀧西遺跡が所在する。また、西隣接地では、事業計画時に発掘調査進行中であった若田坂上遺跡より、縄文時代～古代の堅穴建物跡や古墳時代円墳、弥生時代窪床墓など各種遺構が検出されていた。本事業地は劍崎長瀧西遺跡や若田坂上遺跡より標高の下がる小谷地傾斜部にあったが、周辺遺跡からは地形的に連続しているため、遺構・遺物の残存が想定された。

同年11月、文化財保護課により実施された試掘結果において、人頭大の礫を数段積んだ石積遺構の一部を確認した。このことを受け、土木課と文化財保護課との間で埋蔵文化財保護の協議を行ったが、土木課より事業計画の変更は困難であるとの回答を得た。事業予定地内において検出が予測される各種埋蔵文化財への工事による影響は不可避とのことであったため、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

第2節 調査の方法

当遺跡は、西より緩やかに傾斜する八幡台地上にあり、高崎西部の見晴らしが良好な台地北縁に位置している。調査区は、当台地を南北に縱断する県道前橋安中富岡線を見下ろす西隣のやや高台にある。今回の発掘調査対象面積は約200m²である。

発掘調査では、遺構確認面までは重機を使用した表土除去作業を行った。発掘調査中の掘削によって生じた排出土は、調査区隣接の未使用地に仮置きして管理した。遺構確認面では人力により遺構平面プランの検出を行い、遺構の形状や重複関係の確認を行った。遺構確認後は土層観察用ベルトの設定や半裁方向を決定し、順次人力での掘削を行った。土層観察用ベルトは、各遺構の覆土堆積状況などを観察し、分層作業や写真撮影、断面図化作業を行った後に取り除いた。

掘削が完了した遺構はフィルムカメラを用いて35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルムおよびデジタルカメラにより記録写真撮影を行った後、光波測距儀や平板測量で平面図および断面図ならびに遺物出土状況の記録図作成を行った。検出した遺物は出土状況の記録写真や分布状況の記録図面を作成した後、遺構ごとに取り上げを行った。すべての遺構の調査が完了した後に埋め戻しを行った。

第3節 日誌抄

平成27年		1月18日	30cmの積雪
12月21日	重機による表土掘削開始	1月28日	石積遺構の東縁列を検出
12月25日	試掘時のトレンチを確認	2月4日	調査区北半の掘削開始
		3月8日	空中写真撮影
平成28年		3月15日	石積遺構断ち割り
1月6日	石積遺構南側平坦部ローム面検出	3月18日	埋め戻し完了
1月13日	石積遺構の礫列を検出	3月30日	撤収完了

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

若田坂上遺跡 2 が所在する若田町は、群馬県高崎市の西部、八幡台地上にある。八幡台地は、巨視的には榛名山南東麓に位置しており、およそ50,000年前に室田火碎流により形成された火碎流台地である里見台地と地形的に連続している。また、本遺跡付近の台地上は、谷地により大きく 3 つに分かれる。そのうち本遺跡は最も北側の平坦地にあり、八幡台地の北側縁辺部に位置している。

なお、遺跡地の標高は現地表面でおよそ148mを測り、当台地の北側を南東流する烏川の河岸段丘とは比高差20m以上の高台となる。

第2節 歴史的環境

若田坂上遺跡 2 (1) が立地する八幡台地周辺には数多くの遺跡が所在する。以下で時期ごとに見られる遺跡の摘要を記す。

旧石器時代 高崎の旧市内では旧石器時代に属する遺跡の検出は顕著でなく遺物の出土が散見されるのみである。本遺跡周辺では、八幡中原遺跡 (16) でローム中より石器数点の検出があったほか、後世の遺構より流入遺物として数点が出土している。

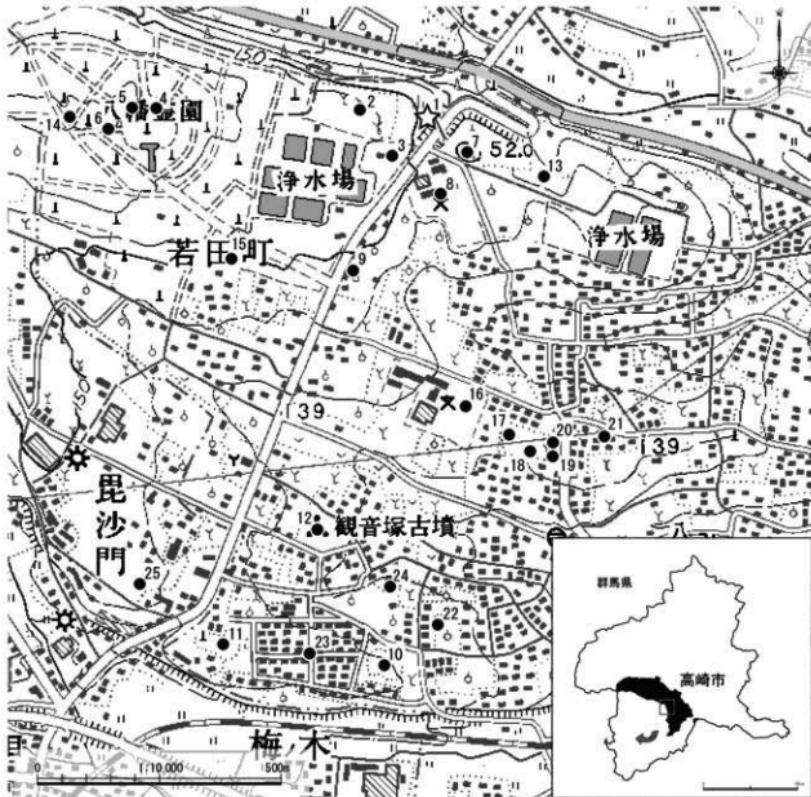
繩文時代 本遺跡東に所在する剣崎長瀬西遺跡 (13) では草創期土器群の出土があり、本遺跡周辺の繩文時代の活動が当該期まで遡る可能性を示唆している。また、本遺跡南東の大島原遺跡 (8) では調査範囲が狭いながらも竪穴建物跡を検出し、中期後半を中心に一部前期後半まで遡る土器も出土している。本遺跡西の若田原遺跡 (14) はやはり中期後半を核とし前期末から後期にかけての集落展開を確認しており、本台地における中核的な遺跡と位置づけられている。

弥生時代 本遺跡周辺では剣崎長瀬西遺跡および八幡遺跡 (23) の周辺において集落遺構の検出が顕著である。剣崎長瀬西遺跡（剣崎遺跡）では後期を中心とする竪穴建物跡78軒が検出されている。さらに東方には後期竪穴建物跡37軒を検出した引間遺跡がある。南西 1 km の八幡遺跡では、後期を中心とする竪穴建物跡が確認されており、埋没覆土中に一次堆積と推定される浅間 C 軽石層があることから建物跡の埋没時期を知ることが可能な例が含まれる。また八幡遺跡に近接して四ノ市遺跡 (24) や八幡六枚遺跡 (22) などでも竪穴建物跡が検出されており、これらの遺跡の動向は八幡台地南縁の集落展開を考える上で重要な資料となる。その他に八幡遺跡では砾床墓や土坑墓、遺構内より多量に出土する土器の中において銅鏡が出土した特殊遺構がある。

古墳時代 本遺跡周辺には、鉄製矛や横矧板鉢留短甲を出土した若田大塚古墳 (4) や橋ノ木塚古墳 (5)、峯林古墳 (6) があり、東には三角板革綴短甲や滑石製模造品を出土した剣崎長瀬西古墳 (7)、方形墳や積石塚が確認された剣崎長瀬西遺跡の他、大島原遺跡など古墳が一定範囲で高密度に構築されている。また、八幡台地南辺には二子塚古墳 (10)、平塚古墳 (11)、国史跡八幡觀音塚古墳 (12) が比較的良好な状態で現存する他、八幡遺跡では全長30mの前方後円墳 1 基および円墳 22 基が調査された。本遺跡に西接する若田坂上遺跡 (2) では後期の円墳複数基を検出している他、中期～後期の竪穴建物跡が検出されている。剣崎長瀬西遺跡では、韓式系土器や金製垂飾付耳飾などの出土があり、渡来系要素の強い集団の存在が想定されている。また、土坑より馬の歯とともに出土し馬に装着した状態で埋まったと考えられる轡は X 字鉢留の鏡板を持つ特徴的なもので、国内最古級と想定されている。

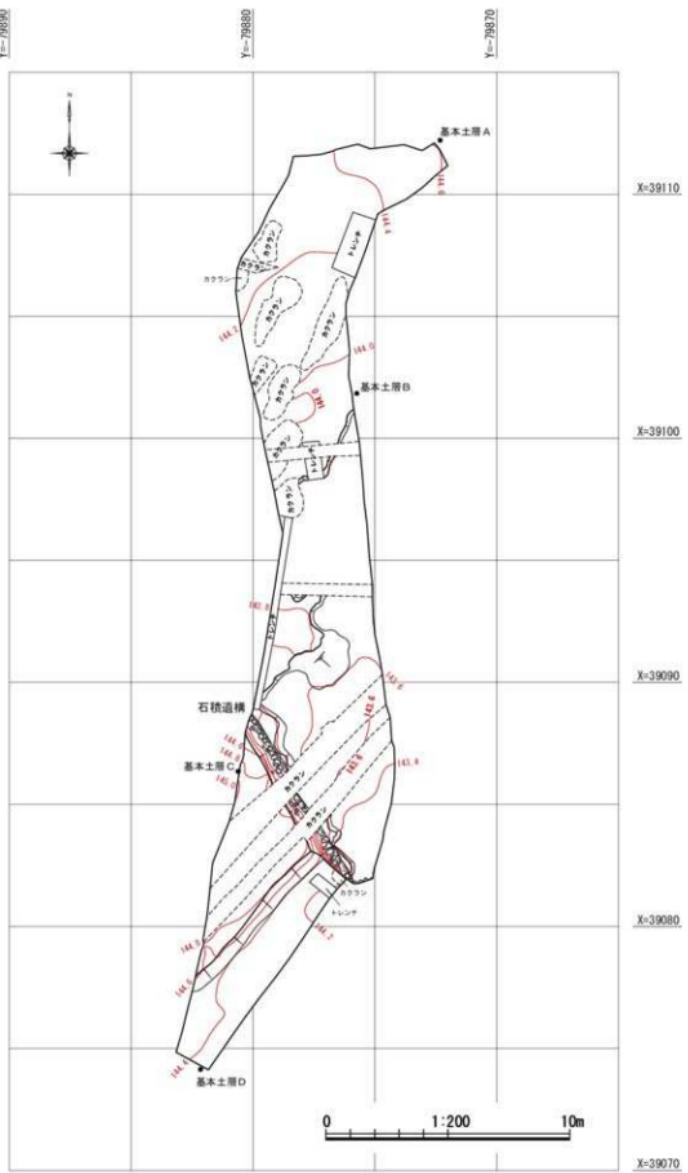
奈良・平安時代 本遺跡より南東 0.6km に所在する八幡中原遺跡では、中学校建設に伴う 1・2 次調査 (16) で雨落ち溝を持つ大型掘立柱建物跡を検出しており、一般集落とは異なる特殊な用途を想定することができる。また、3 次調査 (17)・5 次調査 (19)・6 次調査 (20) や七五三引遣

跡(21)において版築による掘込地業や礎石と想定される大型礎の検出があることから、地盤改良を伴う礎石建物の存在が推定される。さらに、検出したこれらの掘込地業が一定の法則をもった配置を取ることが明らかとなった他、3次調査や4次調査(18)で区画と考えられる大規模な溝が検出されており、建物群は囲繞されることが想定される。これらの遺構に加え4次調査では溝より円面硯片、本遺跡南東1kmの八幡六枚遺跡2(22)では肩部に「片豈郡」と刻書された須恵器焼片が出土している。これら構造物の様相から、八幡中原遺跡を中心とする当八幡台地に古代片岡郡に関連する官衙遺跡が想定される。本遺跡周辺では、若田屋敷裏遺跡(15)で平安期を中心に堅穴建物跡27軒を検出しており、そのほかやや大型となる2棟を含む掘立柱建物跡7棟を確認している。



1. 若田坂上遺跡2(本調査)
2. 若田坂上遺跡
3. 若田金堀塚遺跡
4. 若田大塚古墳
5. 植ノ木塚古墳
6. 峯林古墳
7. 劔崎長瀬西古墳
8. 大島原遺跡
9. 物見塚古墳
10. 二子塚古墳
11. 平塚古墳
12. 観音塚古墳
13. 劔崎長瀬西遺跡
14. 若田原遺跡
15. 若田屋敷裏遺跡
16. 八幡中原遺跡(1・2次)
17. 八幡中原遺跡(3次)
18. 八幡中原遺跡(4次)
19. 八幡中原遺跡(5次)
20. 八幡中原遺跡(6次)
21. 七五三引遺跡
22. 八幡六枚遺跡2
23. 八幡遺跡
24. 四ノ市遺跡
25. 安中市龍の塚古墳

第1図 若田坂上遺跡2 周辺遺跡位置図



第2図 若田坂上遺跡2 遺構全体図

第3章 検出した遺構

第1節 調査の概要

今回の調査では、近世以降の石積遺構を検出した。遺物は遺構に明確に伴うものではなく、表土層中より須恵器や土師器の破片が少量出土しているのみである。遺構の詳細は後述する。

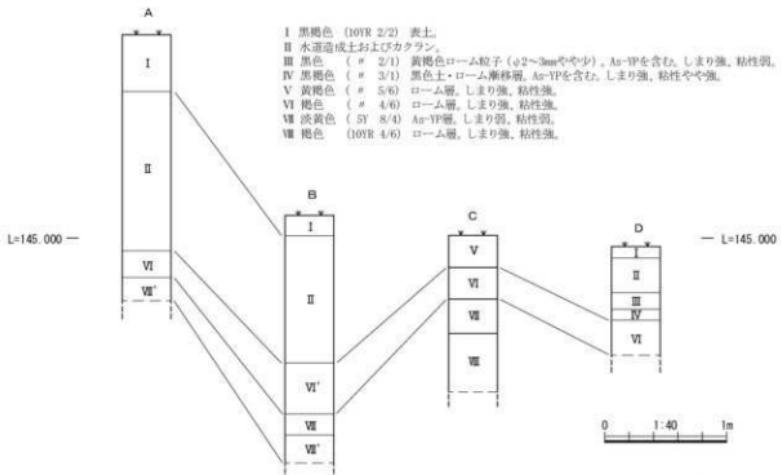
第2節 基本土層

基本土層は4地点で観察した（A～D）。A地点は調査区の北端で、明治期の設置とされる水道管の土盛りにかかっているため極端に標高が上がる。A地点よりB地点までの間は本来想定されるAs-A、As-Bの軽石層が単層としては存在せず混土層としてのみ見られる。また、黄褐色ローム層直上までビニールなどの近現代の混入物を含む表土・盛土層が存在する。遺構の検出も特になく、カクランと判断される不定形の掘り込みを確認したのみである。そのため、本調査区の特に北半分については掘削を伴う大幅な地形改変が行われたことが推測される。

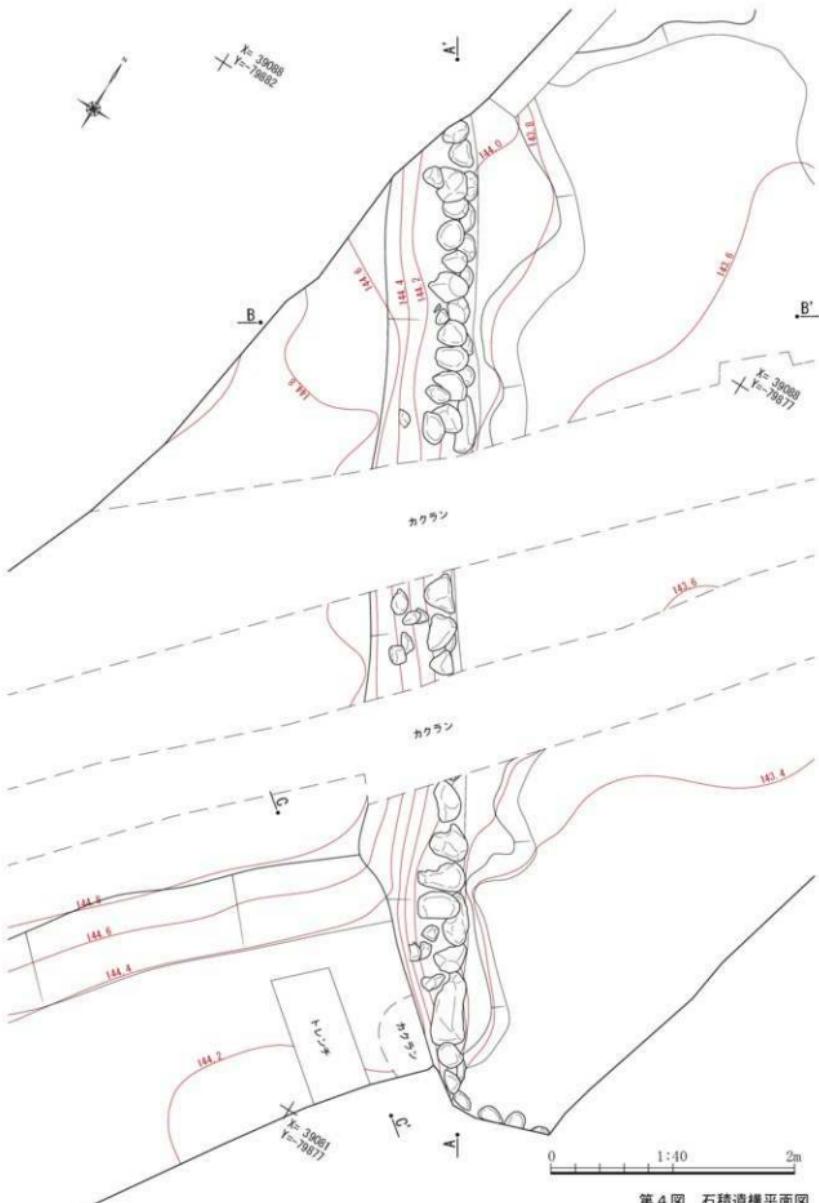
石積遺構を検出したC地点では表土層はほぼ存在せず、現地表面より掘削直後に黄褐色ローム層が検出された。これらのことからやはりC地点付近においても、自然地形が大きく改変された状態にあることが理解される。

調査区南端となるD地点では、表土・カクラン層以下には黒色土層（III）および黒色土と黄褐色ローム層との漸移層（IV）が存在するが、軽石など火山噴出物層は残存しておらず、古墳時代以降の土層は失われている可能性が極めて高い。

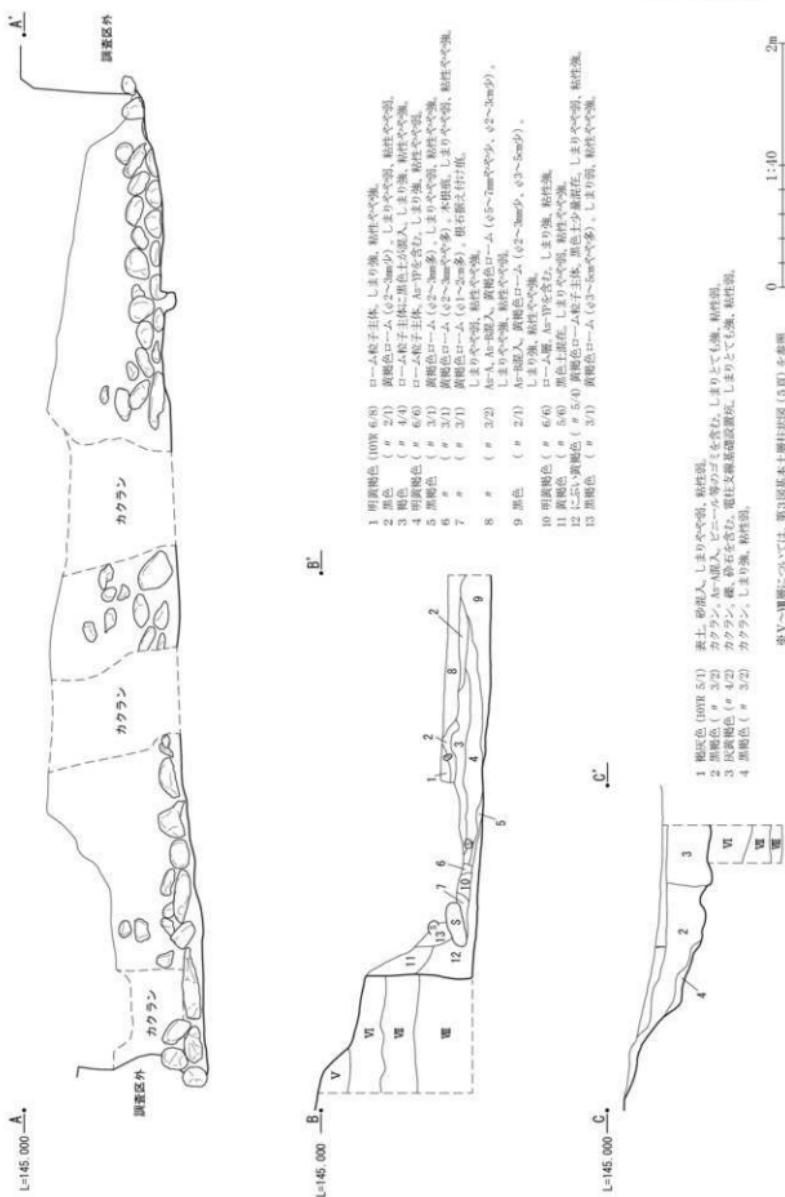
各層の特徴は以下のとおりである。Iは表土層、IIは造成やカクラン層でAs-AやAs-Bが混入する。III以下は地形改変の影響を受けずに残存する自然土層である。IIIはAs-C軽石が混入しないことから弥生時代以前の土層と判断される。IVはIIIと続くVの漸移層である。V、VIはローム層、VIIは浅間山板鼻黄色軽石層（As-YP）である。調査区南寄りで検出した石積遺構は、VII層以下まで掘り込んで構築されていた。



第3図 若田坂上遺跡2 基本土層柱状図



第4図 石積遺構平面図



第5図 石積遺構立面図・断面図

第3節 検出した遺構

(1) 石積遺構

調査区南寄りにおいて、人頭大の礫を積む石積遺構を検出した。

規模 遺構は途中を水道管理設溝等により破壊を受けているが、検出範囲では長さ7.9mを確認した。遺構の両端は調査区外へと延びるため全容は不明であるが、本来的にはさらに延伸するものと推測される。根石基底部より上段端部までの高さは90~100cmほどであり、石積高さは概ね30~40cmが残存している。

構築位置 石積の周辺は、石積遺構を境に標高144.8mほどの高台部と標高143.6mほどの低地部に分かれており、高低差はおよそ1.2mほどの段状となる。この段はローム層を削るようにして人工的に造られており、掘削された断面は鉛直方向に鋭利に削られている。石積遺構はこの高低差断面の低地部側に構築されている。

構造 石積は概ね2段が認められ、各段は横目地が揃うように積まれている。検出している2段の石列より上位には局所的に礫が点在するため、本来的には3段以上の石積があったことが想定される。石積は北西から南東に向かいやや下がり傾向の傾斜が見られる。最下段（根石）にはところどころにやや扁平で大振りの礫を配し、長手側を正面に向けて据えている。石積を正面から観察すると、北西側で規模の似る礫を比較的丁寧に並べていることに対し、南東側は礫の規模や形状にはばらつきが看取される。積み方は自然石の布積みが基調となるが、特に2段目の一部では礫に角度をつけ、隣接の礫と支え合う落とし積みの技法と考えられる箇所がある。

礫間隙の土壤 細い隙間に有する黒褐色土があるが、礫の据わりを安定させるために意図的に充填させたものと推測される。また、掘り方となる地山ローム層の断ち割り断面との間隙にもローム粒子が多く含む粘性の強い土層が含まれ、石積の補強としていた可能性が考えられる。2段目より上位の礫については、礫が積み上げられているというより強粘性的土層に礫を貼り付けているような印象を受ける。全体的には堅牢な石組みとはなっておらず、また、掘り方となる地山ローム層も比較的しまっているため、石積遺構の機能としては土壤流出防止が主目的とは考え難い。

付帯遺構 石積の南西側の高台部は、現地表面直下でローム層がすぐさま露出する。遺構有無の精査を実施したが、明確な遺構は確認できなかった。さらに、高台部の南東側では地山ローム層が削られて中段状の落ち込みを呈しているが、堆積土の観察からこれは後世の改変によるものであることが考えられる。石積も直線的で湾曲や屈折などの変化は見られないため、上述の落ち込みとは連動していないものと推測される。また、北東側の低地部においても同様に精査を実施したところ、石積前面に幅40~80cmの不定形の中段があり、さらに北東側に向かって20cmほど下がる落ち込み（下段）を検出した。ただし、これらの中段・下段には石積と関連すると判断できる遺物はない。そのため、石積と中段・下段との一体性および関連性について詳細は不明である。

構築時期 石積のなかには平置きにならず角度をつけて据えている礫が看取される。いわゆる落とし積みの様相を呈していることから、近世および近世以降の構築の可能性が高いと考えられる。

第4節 まとめ

本調査では、石積遺構を検出した。調査成果を整理すると、石積遺構は自然地形を改変し人工的に造り出された段差に沿うように、屈曲することなく長さ7.9m以上に直線状に構築されている。石積の組み方には落とし積みを思わせる積み方も見られるため、遺構の構築は近世以降の可能性が考えられる。

石積遺構に伴うその他の遺構や遺物が見られず、石積遺構の性格等を明らかにすることは困難であるが、各時代の遺構が検出される周辺遺跡を含む本遺跡一帯において継続的な人間活動の痕跡が確認できたことは成果と言えよう。

写 真 図 版



若田坂上遺跡 2 調査区遠景 (東→)



若田坂上遺跡 2 調査区全体 (西→)



先掘調査前風景（北一）



先掘調査前風景（南一）



黒機による表土除去作業風景（北一）



先掘調査風景（北一）



石積造構 完成状況（北西一）



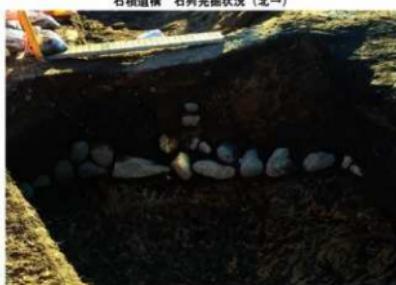
石積道構 石列完掘状況（北東→）



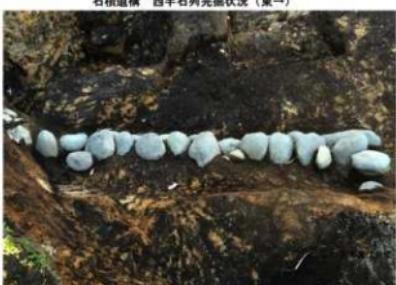
石積道構 石列完掘状況（北→）



石積道構 西半石列完掘状況（東→）



石積道構 東半石列完掘状況（北東→）



石積道構 西半石列完掘状況・上より（南西→）



※等高線合成





基本土層 A 土層断面（南西→）



基本土層 B 土層断面（東→）



基本土層 D 土層断面（北東→）



調査区北側 退模確認状況（南東→）



調査区積雪状況（北東→）



調査完了後埋め戻し風景（南→）

報告書抄録

ふりがな	わかたさかうえいせき 2						
書名	若田坂上遺跡 2						
副書名	市道C-1001号線歩道橋整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第404集						
編著者名	山本 ジェームズ						
編集機関	高崎市教育委員会						
所在地	群馬県高崎市高松町35番地1						
発行年月日	平成30年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
わかたさかうえいせき 若田坂上遺跡 2	ぐんまけんのかさきしわかたまち 群馬県高崎市若田町328-1	102024 660	36° 20' 57"	138° 56' 36"	2015.12.21 ～ 2016.3.30	200m ²	歩道橋整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
若田坂上遺跡 2		近世以降	石積遺構				

高崎市文化財調査報告書 第404集

若田坂上遺跡 2

—市道C-1001号線歩道橋整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査—

印刷・発行日 平成30年3月31日
編集・発行 高崎市教育委員会
群馬県高崎市高松町35番地1

印刷 杉浦印刷株式会社